

北海道大学の今を伝える

41号

2010 *Litterae
Populi*
Hokkaido University
【季刊誌】

リテラ ポプリ

特集

北大は法学・政治学で
未来を築く

座談会

法学研究科 長谷川 晃 宮本 太郎 田村 善之
公共政策学連携研究部 中島 岳志

政治のダイナミズムを探る面白さ

法学研究科 吉田 徹

多様な国際社会で対話するための「ツール」

国際法・国際環境法
公共政策学連携研究部 児矢野 マリ

施設探訪 北部食堂

シリーズ

虫と石 ⑩

もういちど北大と出会う〈その十九〉



「文化の恩恵は未だ民衆に及ばず、持つて生れた生存権さへ自由に行使し得ないではないか——文化生活運動に生涯をかけた消費経済学者——」

札幌農学校第十九期生 森本厚吉



森本厚吉
Morimoto Kōichi

一八九〇年三月、舞鶴明倫高等小学校を卒業した森本厚吉（一八七七—一九五〇）は、東京進学の願望を抑えられず、翌秋、父母にその胸の内をうち明けた。

▼「東京に出て勉強しやうとする自分の熱望に同情してくれた母は、慣れない実業に手を出して三度も失敗した貧乏士族の主婦として他に金策を講ずるみちがなく、遂に自ら恥をしのいで、初めて質屋の暖簾をくぐつて漸く旅費を調達して呉れた（略）其翌々日旅路の門出を見送つてくれた母は辛ふじて告別の言葉を言ひ得たのみで、あとは只涙にむせんで居た」（『滅びゆく階級』一九二四年、四頁）

父母の慈愛に支えられて、森本厚吉は、横浜・東京での遊学を経て、一八九五年七月、札幌農学校予科に入学した。九七年九月同校本科に進学後、農業経済学を専攻した森本

厚吉の眼差しは、自己の貧困から、当時人口の最大多数を占めた「農民」の貧困へと向けられた。

▼「余ノ笈ヲ負ヒテ札幌農学校ニ遊ビ農学ノ教授ヲ受クルヤ、農民ニ対シ益々多クノ同情ト趣味ヲ有スルニ至リ。爾來數年ニシテ腦裏ニ刻スル事愈々深キニ至レリ。日新ノ今日交通機關ノ發達ニ伴ヒ世界的經濟ノ行ハルル時ニ當リ（略）我國大多數ヲ占ムル農民ノ憐ムベキ悲境ニアルヲ見、農業ノ改良發達ヲ画セントスル者久シカリシガ、之ヲ為スニ先ダチ、農ノ本体ナル農民ヲ深く研究スルノ必要ヲ感じ茲ニ本論ヲ艸スルニ至レリ」（卒業論文「農民ニ関スル研究」一九〇一年、句読点は引用者）

卒業後、米國留學を経た森本厚吉は、消費經濟學者として母校で教鞭を執つた。一九一〇年代、日本では「國民」の間に貧富の

格差が拡大し、その深刻な現状に、森本厚吉は憤りを感じていた。

▼「如何に我國が世界五大強國の一つとして誇つて居ても、文化の恩恵は未だ民衆に及ばず、單に少數の特殊階級者や富豪に專用されて居るのみで、同胞の大多數は持つて生れた生存権さへ、自由に行使し得ないではないか」（『新生活研究』一九二三年、一一頁）

森本厚吉は、すべての人には生存権があり、その先には、人間らしい文化的な生活を営む権利、すなわち生活権があると考えていた。

▼「生存 (Existing) と生活 (Living) とは決して同一のものではない。經濟生活が生存より生活へ進んだ時、初めて人の持つて生れた生活能力が充分に發揮されて、茲に文化は開發され、人は意義ある生を楽しむ

み得るものであると確信する。旧時代に於ては、かゝる幸福な生活を営む事の出来る人は、極く少數の特殊階級者のみで、大多數の民は富の生産の為に必要な道具となり、一生貧しい暮^{くら}しをして、漸く露命をつなぎ生存さへして居ればよいと云ふ運命を有するものと考へて居つた。併し新時代



札幌農学校卒業記念（1901年）
私立北鳴学校出身の札幌農学校 19 期生。中列右端が森本厚吉（大学文書館蔵）

Litterae Populiとはラテン語で「ボブラの手紙」という意味です。北海道大学(および、その前身である札幌農学校)にゆかりのある人々の言葉を「リテラポプリ」としてお届けします。

目次

リテラポプリ 2

「文化の恩恵は未だ民衆に及ばず、
持って生れた生存権さへ自由に
行使し得ないではないか
—文化生活運動に生涯をかけた
消費経済学者—」
札幌農学校第十九期生 森本厚吉
大学文書館 山本 美穂子

特集：北大は法学・政治学で未来を築く… 4

座談会

法学研究科 長谷川 晃
宮本 太郎
田村 善之
公共政策学連携研究部 中島 岳志

政治のダイナミズムを探る面白さ
法学研究科 吉田 徹

多様な国際社会で対話するための
「ツール」— 国際法・国際環境法
公共政策学連携研究部 児矢野マリ

施設探訪 15

北部食堂
広報課 伊藤 仁浩

虫と石¹⁰ 16

ヨトウガ
総合博物館 大原 昌宏
緑柱石(ベリル)
総合博物館 松枝 大治

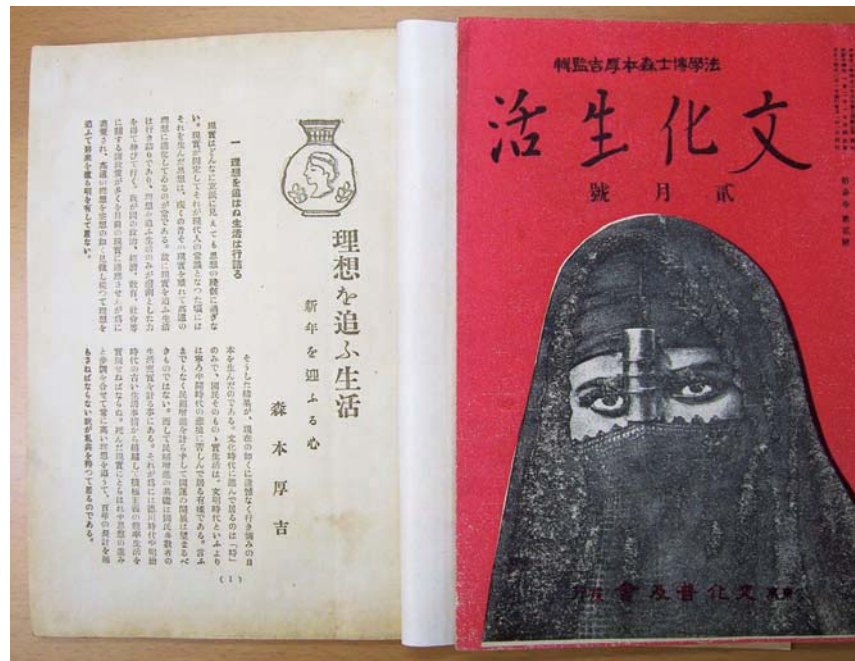
もういちど北大と出会う(その十九) 18

懐かしき新天地で
法学部1年 池上 恒太

information 19

建築設計図が語る北大の歴史(第20回) 20

南門(旧札幌農学校正門)
工学研究院 池上 重康



『文化生活』 文化生活運動を共にした親友 有島武郎(19期生)のほか、佐藤昌介(1期生)、新渡戸稲造(2期生)、松村松年(13期生)、星野勇三・半澤洵(19期生)など、札幌農学校の恩師・同窓生たちも『文化生活』への執筆に協力を惜しまなかった(大学文書館蔵)

に於ては、単に生存するのみでなく、能率の高い文化生活を営むべきもので、其の生活権を各人が立派に行行使し得るものである事を当然と認むるのである」(『生存より生活へ』一九二二年、一―二頁)

一九二〇年、森本厚吉は、「文化生活研究会」を組織し、「生存より生活へ」をスローガンに、家庭における消費生活の改良から社会改造を實現させる「文化生活運動」を提唱した。

▼「現代文化の要求は社

会の根本的改造であるが其の基調は個人の改造である(略)個人の改造は先づ各自が人格を尊重し天与の生活権を自覚することに始まらねばならぬ(略)民衆をして文化生活を営ましめよと云ふことが現代文化の開発に必要な第一声である」(前掲『生存より生活へ』第一章の一―二頁)

森本厚吉は、衣食住等の消費生活を科学的に徹底分析して、「斯くあるべきである」という「生活標準(The Standard of Living)」を設定し、それに応じた経済的・合理的な生活設計を家庭で営むように推奨した。

そのために、一九二二年啓蒙雑誌『文化生活』を発刊し、二六年日本初の洋式集合住宅「文化アパートメント」を開館して、具体的な文化生活モデルを提示した。二七年には「女子文化高等学院」も創設し、運動の重要な担

い手を育成した。

消費経済学をはじめ、社会科学は「生きた人間」が対象だからこそ、「その研究の結果がひいては人類を幸福にし社会を益するものであらねばならない」(『現代社会と社会科学研究法の根本的誤謬』一九二七年三月一八日付『北海道帝国大学新聞』一三画)との理念からであった。

一九三三年三月、森本厚吉は、「文化生活運動」に専心するため、惜しまれつつ北海道帝国大学教授を辞した。「私の一生の目的の一は親の敵討即ち貧乏退治をする事で此の大きな目的の為に私は奮闘の生涯を社会改造の為に送らう」(前掲書)との信念を貫いた決断であった。

大学文書館 山本 美穂子

Yamamoto Mihoko

座談会

北大は法学・政治学で 未来を築く

どのような社会にも法があり、人間と社会の活動は法によって支えられている。
一方で法は、あるべき社会を実現するために、人間によって作りだされる。
また法は、その社会の文化と歴史を背景に形成され、社会の変化によって変容しうる。
このように、法にはその社会の理想や現実が込められている。
北大は、そのような法と社会の関係を考究し、未来を築く人材を育て続けている。

● 今回の座談会では、四人の先生に、それぞれの研究や経験を踏まえて、現在の日本社会を診断していただき、日本社会の未来を築くという観点から自由に語っていただきます。
まず、学生時代にどんなことに関心があったか、順にお聞きしたいと思います。



中島 岳志

Nakajima Takeshi

公共政策学連携研究部准教授



田村 善之

Tamura Yoshiyuki

法学研究科教授



宮本 太郎

Miyamoto Taroh

法学研究科教授



長谷川 晃

Hasegawa Koh

法学研究科教授

学生時代の関心

中島●一九九五年、僕は大阪で学生生活を過ごしていたのですが、一月に阪神大震災、三月に地下鉄サリン事件がありました。八月に村山談話問題などで、歴史認識やナショナリズムの問題が大きくなった。宗教とナショナリズムという実存に触れる問題が日本中で大きく沸騰しながら、単純化された議論がメディアで横行していた。戦後五〇年間日本は愛国と信仰に関する問題をどう考えてきたのかというのが当時出た問題。この二つが大きくなった戦前の日本の右翼思想に関心をもった。また、同時代のインドでは宗教とナショナリズムが異常に大きく変わった時代がやってきた。

保守思想との出会いから、社会問題へのコミットメントへ

●では、まず中島先生に現在の関心と社会とのかかわりについてお聞きします。インドへのご関心から日本社会をどうご覧になっていますか。また、保守思想についてよく言及されますが、それほどのような意味をもつのでしょうか。中島●二〇歳のときに宗教とナショナリズムの問題に出会い、図書館にこもって大量の本を読みました。理性あるいは

現代日本における自分の問題を考えるために、時間軸をずらして戦前の日本を見て、空間軸をずらしてインドで起きていることを見る。それによって自分がどういう状況に生きているのかを逆照射させるのが、学生時代の一番の関心でした。

田村●大学一、二年のときは、英語劇に傾倒していました。演劇ではスクリプト(脚本)を読み込むだけでなく、演出家の作りたいもののためにスクリプトが活かされている。これは、法律の条文をスクリプトに見立てて解釈を構築するという法学方法論に近い。授業を受けながらそんなことを考えていて、自分でも何かできると思いました。学問の道に行くことに決めました。そして知的財産法の分野の助手になりました。

長谷川●高校のとき進路に迷って父親に相談したところ、「法学部はつづしが利くから」と言われ、法学部を受けました。当時は哲学に興味をもち、我流で本を読んでノートを作っていました。二年のときに他学部編入試験があり、哲学科に行こうかとも思いましたが、法学部にも法哲学があつて自由に勉強できるということで、法学部にとどまりました。

法哲学のゼミはすごく面白かった。図書館に出入りしていろんな本を読みましたが、四年のとき東京大学の碧海純一先生が書いた『法哲学概論』を読み、大きな知的衝撃を受けました。そこで碧海先生の勧める本をとにかく読みました。その後もっと勉強したいと思い、東京大学大学院に進学しま

自分の能力への過信があり、書物を読んではいけば世界を把握できると思っていました。しかし合理的に物事を考えるほど理性の限界に出会わざるを得ない。世界全体を把握することは不可能だと認識せざるを得ない。そのときに出会ったのが親鸞の悪人正機説。親鸞は自力の限界を説き、絶対

他力を考える。惡に自覚的になったとき、自分の能力を超える視点をもてる。また保守思想は合理主義の限界を説いて、人知を超えたものに依拠し、経験知や良識に基づいて社会を漸進的に変えていくという思想。理性への過信から来る革命思想には誤りがあるとする。バークや西部邁の著作を読んで納得しました。当時は仏教思想と保守思想が正しい

した。

宮本●高校では軽音楽部に入っていたのですが、難しい本も読んでいました。分かったふりをしないとカッコがつかないということで、使えそうな言葉を拾って議論していました。

大学でも軽音を続けながら、学生運動の真似事にもかかわっていました。世の中の秩序を全て変えろとか、全生活を犠牲にするとか、旧態依然たる学生運動のロジックには馴染めなくて、いろんなことを考え始めました。政治学のゼミで、普通の価値観に沿って生活をしながら、政治とかかわる条件を備えた国があることがわかり、考える道筋を探り当てたという感覚をもったのが、学部時代でした。

中島先生の代表作



中島先生の大佛次郎論壇賞受賞作『中村屋のボース』(白水社)。インド独立運動家がいかに日本の戦前思想と出会ったか知ることができる。

と思ったのです。

すると図書館にこもっている自分を疑い始めるわけです。ここで物事を考えていること自体が、自分の思想から外れる。僕は観念的に物事を考えるのが好きであるがゆえに、フィールドに出ないといけないと思いました。いったん書を捨て社会に出ないといけないと考えて、大学院では文化人類学を選びました。フィールドで起きている現象自体から物事

を考えたいと思って、インドに行きました。ヒンドウのナシヨナリストたちと共同生活し、彼らは毎日何を食べ、どんな行為をして、どこから宗教とナシヨナリズムに引かれていくのかを地べたから考えたいと思った。今の自分を考えるためにインドに行き、彼らと共有できる問題を探りたいという思いがずっとあります。

● こうした先生の関心は社会的にどんな意味をもつとお考えですか。

中島 ●僕は三五歳で、ロスジェネ世代。団塊ジュニアだから同年代が多いんです。高校を出た頃にバブルが崩壊し、大学を出た九七、八年頃は、就職氷河期。フリーターという労働環境の中で、これが自由だと思って生きてきたわけです。僕も大学院に進むことが自由な選択だと思ってきました。しかし厳しい生存の中に僕

たちは追いやられる。新しい歴史教科書を作る会とか、小林よしのりの『戦争論』とかがこの世代に受けるという現象が生じて、ナシヨナリズムが代的な問題とリンクしてくる。そう理解したとき、自分は思想的にどう戦ったらいいいのか考えました。こうして僕は、労働運動や反貧困に突っ込んでいき、いまソーシャル・インクルージョンの問題で商店街にもかかわるようになったのです。

知財を作っても世の中が栄えるわけではない

田村先生のゼミ風景



● 田村先生。情報社会における知的財産権の課題とその解決の手立てについてお聞きしたいと思います。また、日本は「知財立国」とも言われますが、今後の

展望についてお話をいただけますか。

田村 ●知的財産とは情報や行為に関するあるパターンのこと。人が歌を歌ったり、発明をしたりする行為のある側面を知的創作物として権利化しているのです。経済的価値が高いので、国際的なロビイングのなかで、より権利が強化されるという問題があります。

メールやFAXをするときに著作物を複製することがありますが、著作権法にはそれを自由とする条文がない。それを自由と主張する人も少なく、アンタッチャブルな領域なんです。実際の著作権法の条文は多くの人の理解とは違い、かなり権利者寄りに歪んでいる。

従来の法学では、法は民主的なプロセスを経てきたものだからよいもの

だという前提があつて、それらが矛盾している場合、条文を解釈して対処する。でも知的財産権の場合、特許法や著作権法が歪んだものになって、それでは対処できない。権利や法の形成過程にメスを入れて議論しなければいけない。政治学・経済学・法学が相互作用的に役割分担をし、課題に取り組むべきだと私は考えています。

「知財立国」についても問題がある。

知財を作っても世の中が栄えるわけではない。法や権利ではなく、中身の豊かさが大事。ではどうしたらいいかというと、国内と国外で分かれてきます。

国内では特許と著作権で分かれる。特許だと、産業分野別に様々なイノベーション構造があるんですが、法は平等性を保つために、発明という言葉で一括して特許権を与えています。その

なかで、いかに産業分野ごとに特許を区別するのが課題。著作権については特許以上に生活にかかわる。皆が思っている著作権と著作権法が乖離している。これが国内での課題です。

大事なのは外国との関係。産業分野に関して、各国で知財レベルに大きな差がある。米国は二〇世紀半ばまでは英国文化を移入しやすくなるため、著作権を弱くしていた。日本は工業発展のため弱い知財制度でずっと来た。それが日本では一九九〇年頃に実現した知財の水準を条約を通じて国際水準として各国に押し付けようとしている。それで日本も米国も富の移転で栄えると思いますが、相手国の状態を悪化させる。それには大いに疑問をもっていて、日本の枠内で知財立国を考えるべきではない。各国の知財意識ごとに対応を変えることが課題です。

抽象的な概念にもリアリティがある

●では、長谷川先生。日本の法制度に関して正義が十分に実現できない部分があるのかどうかという問題があると思いますが。

長谷川 ●正義論はすごく抽象的です。物事を交換するにしても、罰とか損害賠償を与えるにしても、財を分配するにしても、その基準について議論する。しかし抽象的な概念にもリアリティがあり、どこかで人間や社会を動かしていると思います。

最近の法哲学は、様々な事例を基に考察しているとはいえ、百家争鳴状態。

分配の正義にしても、いろんな立場の人が具体的なケースを念頭に置きながら様々な主張をしている。正義の立場によって、具体的な問題の扱い方が変わってくる。例えば市場原理主義的な考え方と、格差社会を是正する考え方は、市場メカニズムをどこまで許容すべきかに関して議論が分かれる。だから、自分なりにどういう正義の見方をとり、他の見方とどう関係させて議論するかが大事。特定の問題、例えば社会保障や貧困問題について考えると、それにフィットする正義論がある。

また、どの立場をとるかによって、法制度がどれくらい歪んでいるか、見え方が変わる。例えば、構造改革以降の新自由主義や市場原理主義に対するスタンスも、どういう正義の考え方をとるかで議論が変わってきます。自分の正義感覚を反省し、社会問題とのかかわりを考える態度は重要だと思います。いろんな正義論を考察しないと、法制度のどこがおかしいのか議論が十分でなくなる。法学部では、そういう目と感覚を磨いて広い視角から議論するのが大事だと思います。

長谷川先生の講義風景



あるべき生活保障とは―綱と綱から考える―

宮本先生の関連図書



宮本先生の近著『生活保障―排除しない社会―』（岩波新書）、日本型生活保障の現状と「シモン」を他国の制度と比較しながら論じている。

●宮本先生。日本社会において貧困と格差が広がっているのはなぜでしょうか。それと社会保障と雇用の枠組みである「生活保障」の方向性とはどのようなものでしょうか。

宮本 ●「生活保障」は社会保障と雇用を包括する言葉。人が生活が続けるには、見返りのある仕事で働かなければならない。失業時に社会保障がセーフティーネットの役割を果たすことで、生活保障が成立するわけです。

こうした構図はサーカスのテント

に例えられます。セーフティーネットとその上に張られている綱です。人生という綱を渡りきれればいいのですが、落ちたら大変なので下に綱を張る。その安全綱がセーフティーネット。日本は安定した社会で、経済も伸びた。綱がしっかりと張っており、減多に人が落ちないくらい綱が太く、みんなが渡れる数の綱があった。だから綱の面積は狭く、年金だとか高齢者医療を中心に人生後半部分に重点的に張ってあった。

ところが九五年頃から様相が変わった。非正規化の流れで細い綱になった。

これまで正規の仕事をお父さんが担ったけれども、その稼ぎでは十分でないから、お母さんがそれを補完して働く。つまり太い綱を補強する細い非正規の綱。そして非正規の仕事で家計を支える人が増え、綱が細いから落ちてしまう。

また、綱が途切れるようになった。九九年に労働者派遣法が改正され、有期雇用も増大した。さらに綱の本数も足りなくなつた。九五年頃から、仕事を外部委託する会社が増え、公共事業も減った。

ところが日本社会というテントは綱

が弱かったので、綱からドンドン落ちるのに綱が支えられなくて、テントの地面に激突してしまいう状況になっている。

では今後どうしていくか。一つはセーフティーネットを強化すること。でもセーフティーネットだけ強化しても、社会というテントは成立しない。とはいえ、男性しか綱を渡れなくて女性には細い綱でそれを支えるかたちは変えるべき。

課題は、細くなり、途中で切れ、本数が足りなくなった綱を

コーディングすること。社会的手当で生活コストを下げるのか、給付付税額控除を行うのか、一つ。また、公的職業訓練を受けて、次の仕事に就けるようなかたちで綱と綱をつなげる方法もある。

それから綱の数を増やすこと。化石燃料から脱却して、住宅や工場のエネルギー効率を高めるとか、リサイクル事業を増やすとか、再生可能エネルギーへの転換を増やす。こうしたグリーンジョブを増やすと、製造業

のコストも削減でき競争力も上がり、仕事も増える。またグリーンジョブはローテクで、中短期的な訓練で就業できる。綱の弾力性を高めて、トランポリン化することも大事。

綱をきちんと張り替えると同時に、雇用という綱だけでない、多様な人生のステージを地域社会で築いていく。NPOとか、ボランティア、子育てを含めて、それらを綱として認定することで、日本社会というテントを甦らせることが大切です。

異分野同士が自由に議論できる環境

● それでは最後に、若い人が北大法学部で学ぶ魅力について、お願いします。

中島 ● 政治には何が不可能なのかという問題から考えるのが、僕の問題です。雇用問題の一部である派遣労働に関する問題や、そこに続く孤立、疎外などから派生する事件の解決策として挙げられるのが、セーフティーネットを整えること。さらに社会の中で実存の場所を作るソーシャル・インクルージョンも必要。だがこれだけでは不十分。

引きこもっている人や派遣労働者の多くはそんな所に出てこない。そのような人に届くのは文学や宗教かもしれない。

僕はこの領域に政治がどう関与するかに関心があるんです。これを越境すると、ファシズムとかナショナリズムが出てくる。実存の不安を覚えた人間がそこにアプローチするときに出てくる問題も同じ。それは戦前のファシズム期にあったし、現代インドにあるし、現代日本にもあるかもしれない。

北大では、貧困問題とか格差問題、社会問題を様々なアプローチで探究できます。制度設計もソーシャル・インクルージョンも重要だし、リベラル・コミュニタリアン論争のような価値問題も重要。政治とそうでない部分のかかわりがどういう悲劇を生み出すのかもトータルで見ないといけない。それを全体として研究できるのが、北大の魅力だと思っています。

田村 ● 北大法学部はかなり自由。相対的にはまだ忙しくないからかもしれないけれども、自由闊達に研究している方が多

道徳感情論

(上)

アダム・スミス著／水田 洋訳



白105-6
岩波文庫

宮本 太郎

アダム・スミス(水田 洋訳)

『道徳感情論』(岩波文庫)

市場原理がいかなる人々の間の暗黙のルールに支えられているか、あるいは支えられるべきかを論じる。こう書くとむずかしそうだが、どんな時に友達の「同情」を期待できるか、逆に人のために尽力するべき時はいつかなど、「空気」をいかに読むかという指南書です。これは役にたつと感じるか、いささか空しくなるか。いずれにせよ古典を身近に感じる本。

KARL R. POPPER

Objective Knowledge

An Evolutionary Approach

Revised Edition

長谷川 晃

Karl Popper,

Objective Knowledge

(Oxford University Press)

(カール・ポパー、森 博訳、『客観的知識—進化論的アプローチ』、木鐸社)

学生時代、原書で読みました(翻訳よりも原書の方がわかりやすい)。20世紀を代表する科学哲学者の一人である著者の独創的な主張にはまさに「眼から鱗が落ちる」経験をし、哲学的問題の探求への姿勢にも大きな感銘を受けました。



い。研究会にかなり人が集まる。その余裕は教育にも活かされている。法曹向けの実践教育が得意な人もいるし、そこから身を置きゆつくり考えている人たちもいる。日本の中でもかなりバラエティのある大学ですよ。こういうところで勉強するのは良い機会になると思います。

長谷川 ● 法学は、法学があまり実務志向になるときに、基礎の問題があるでしょうと言う。政治学があまり生々しいところに入って行こうとすると、原理の問題があるでしょうと言う。こうしたことを研究会などで議論し合える場面が多いのが、北大の魅力だと思います。

特定の法律の条文解釈でなく、その立法過程も含めて全体を見て、いろいろな角度から問題を考えていくのが大事。法の社会的帰結や政治的帰結、法が作られた道徳的な意義などを明らかにしていく力をこの法学部は十分もっています。法哲学とか知的財産法とか政治学とか比較政治を分けて考えず、共通する問題を考えていくと面白い。

宮本 ● いま日本社会のキャリ

ア形成、人生設計のあり方が変化している。大学に入って就職すれば安泰という時代ではない。

これまでの人生設計の真ん中には会社があった。社縁・血縁・地縁という言葉がありますが、日本は社縁が中心で、お父さんは帰宅時間が遅く、血縁のコミニティである家族を犠牲にしていた。また休日になると疲れ果てて寝ているから、地域社会との連携も緩み、地縁も緩む。最近社縁も崩壊して、無縁社会になっている。新たに縁を作ろう、居場所を見つけようとしたときに出てくる障害を取っ払うことも大事。

勉強し直して別の居場所を見つけるための支援は、法や政治、行政ができる。今そういう支えがないと、若い人が直面する不安を解消できない。また、そうした人々が居場所を見つけられなくなり、無縁社会化が進み、キャリア設計が難くなる。

北大法学部は、選択の幅を広げ、自分の責任と決断で人生の舵を切れるような社会に近づけていく土台作りを支援できると思います。歴史や思想を学び、制度設計を考え、そうしたグラン

ドデザインについて議論できる場で、皆さんが直面する問題を持ち寄り、ここで考えてみませんか。

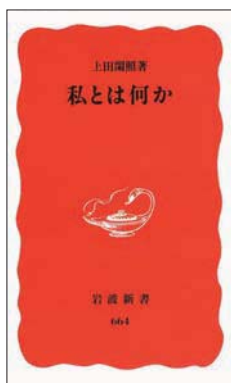
● 皆さん、本日はお忙しいところ、ありがとうございました。



司会・進行
理事・副学長

Hemi Masaki
逸見 勝亮

学生時代に影響を受けた本



中島 岳志

上田 閑照
『私とは何か』(岩波新書)

デカルトは「我思う、ゆえに我あり」と言いました。しかし、著者は「我無し、ゆえに我あり」と説いています。〈私なんていないから、私はいる〉ってどういうことでしょうか？ そもそも存在するって、どういうこと？ そんな「私という存在」をめぐる東洋哲学の真髄を、わかりやすい言葉で説いています。



田村 善之

竹宮 恵子
『ファラオの墓』(スクウェア・エニックス)

滅びた国の王族として生まれ、国の再興を実現するためのリーダーシップをとることを周囲から期待されているという運命を受け入れ、艱難辛苦のなかでその実現のために身を捧げる主人公の姿勢が印象的な漫画です。このように生きることができたらと憧れて今にいらっています。

政治のダイナミズムを 探る面白さ

二大政党制とは？

「二大政党制を計る上で重要なのは、政党の数ではなく、政治がどう動いているかというダイナミズム」という吉田さん。では、どういう場合に二大政党制が機能していると言えるのか。「理念を異にする二つの政党が交互に政権交代を繰り返すというダイナミズムがあれば、二大政党制が機能していると言えます。次の総選挙でもし自民党が政権を取れば、日本でも二大政党制が根づいたと考えられるでしょう」。

また、二大政党制は小選挙区制とセットになっているという。「小選挙区制ではその選挙区で一位になった人が票を総取りします。そのため、政党はできるだけ幅広い民意を集約し、多くの選

二〇〇九年秋、自由民主党から民主党に政権交代した日本は、政治上の大きな分岐点を迎えている。「二大政党制批判論—もうひとつのデモクラシーへ—」という近著を出された吉田徹さんに、二大政党制の意味、日本とヨーロッパの政治制度を比較することの意義などについてお話を伺った。



吉田 徹
Yoshida Tobru
法学研究科准教授

挙区で代表を勝ち取り、多数派を目指します。もちろん、選挙によって、昨日敗者だった政党が今日は勝者になり、政権交代が起きることがある。それが繰り返されることによって、二大政党制ははじめて機能するのです」。

完璧な政治制度はない

そもそも政党とはどういうものなのか。「政党はもともと、国家と社会を架橋するという公的な性格をもち、社会が創りあげるもので、いわば国家と社会の『パイプ役』。社会の側が団結して、ブルジョアや労働者層など、各層の代表を議会に送り込んで、国家の政策や意思決定に関与しようとするところから始まりました。政党は互いに主権の奪い合いを繰り返していたのです」。

一方、民主政治の根底には個人による意思決定があります。政党が弱いと、個人の意思決定を可能にする回路が弱いことになります。国民が政党からの代表者を選び、国家で決まったことが国民にまた降りてくる、という循環によって民主主義は成立する。だから、政党が弱いということは、国家と社会が齟齬^{そご}をきたすことにもなるのです」。

すると、二大政党制の場合、「国家と社会のチャンネルが二つ」しかない。その分、民意が集約されるが、その他の意見が切り捨てられる。他方、多党制だとチャンネルが多く、社会の細かい部分を代表できる。だから吉田さんは「なるべく多様な選択が可能な政党政治の方がいい」と考える。

だが、完璧な政党政治や選挙制度はない。吉田さんは丸山眞男を引用し

て、政治は「悪き加減の選択」だと言う。「われわれが党員に意見を言えば、政党のリーダーに民意がある程度伝えられる。政治参加をしないと民主主義は成り立たない。そのツケはわれわれに跳ね返ってくる。だからこそ政治参加は大事なのです」。

政治制度を比較することの意味

政治学では実験ができない。そのため、学問として客観性を担保する一つの方法が、各国の政治制度を比較すること。ある国の政治制度を分析する場合、他国の政治制度との比較によって、より深く知ることができるという。

では、外国と比較して、日本の政治や社会の特徴はどこにあるのだろうか。

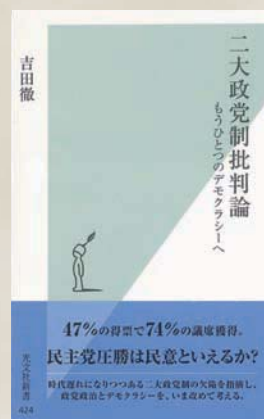




「かつて日本で有意な政党は自民党と社会党と言われていたけれども、長きにわたって社会党は政権を取れませんでした。また、日本は明治時代からずっと『社会』が弱かった。日本は社会が脆弱で国家が強かったため、下のからの政党がなかなか出てこない。官僚制のような国家機構とくっつくことによってしか、政党の存在は保証されなかったのです」。

二大政党制の国は現在、米国とイギリス、ニュージーランドくらいで、世界的に見ると少数派だという。他の多くの国は基本的に連立あるいは二極プロック制であり、右と左のそれぞれの政党が連立して政権交代を行っている。

「われわれがどういう政治制度が良いのか迷ったとき、参考になるのがヨーロッパの政治。ヨーロッパは、革命や抑圧、民主制の崩壊や確立など、政治体制の変動を何度も経験している。例



吉田さんの著書
『二大政党制批判論』（光文社新書）

政治意識の芽生え

えばフランスは、フランス革命、ナポレオン帝政、復古王政……と続き、現在は第五共和制。歴史の中でいろんな制度を試しながら、政治体制の変化の実験をやっていると云えます。ヨーロッパ政治はいわば『実験報告の図書館』なんです」。

吉田さんは日本生まれですが、義務教育をフランスとオーストリアで受けた帰国子女。教室には世界中から多様な人々が集まり、そうした環境に影響を受けたという。「いろいろな人たちが一カ所に集まっているのですが、宗教・人種・肌の色などに関係なく、なぜ公共空間が成り立っているのか不思議でした。異なる環境に身を置くと、他者とどう関わっていくのかに腐心せざるを得ない。それも政治学を学ぶ上での重要な要素です」。

ジャーナリストの父の影響もあり、自宅に様々な週刊誌や雑誌があった。日本

に戻った高校時代に、論壇誌を熱心に読み、早くから政治意識に目覚めたという。大学卒業後、日本貿易振興機構に三年間勤務。その後、東京大学大学院総合文化研究科に進学した。

政治学の面白さはどこにあるのか。

「政治学には答えがなくて、その理論も曖昧なものが多いから、『柔かい』学間と言えます。自然科学のように他の条件が等しいなら常に同じ結果が出る、というわけではありません。政治学におけるモデルは、経験則から導き出される帰納的なもの。政治学は多様で、哲学や計量分析もあれば、比較政治などあるべきかという問いから、今度の選挙はどの政党に投票すればいいのかという身近なところまで、問いの立て方がたくさんあるんです。その曖昧さに惹



フランスの元大統領ミッテランの本。
吉田さんは将来、ミッテランに関する本を書きたいとのこと。

かれますね。一方で、政治の営みは人々の生死にかかわるという意味で実は『硬い』学問でもあります。どういう権力が人々を幸せにするのか。善と悪を常に念頭に置かなければなりません」。

自分の知らない環境に身を置こう

ドイツの哲学者、ゲオルグ・ジンメル「若者がやることはいつも間違っているが、やろうとする意志はいつも正しい」という言葉を引用して、大学生へのメッセージを語ってもらった。「大学時代は人生を生きていくためにベリシク練習をする試行錯誤の時期。たくさん旅に出かけ、たくさん本を読み、たくさん恋愛をして、たくさん失敗すること。自分を客観的にみるために、自分の知らない環境に身を置き、他者を知ること、新しい自分を発見できます。失敗しても、そこから教訓を引き出すことで人生も豊かになり、ひいては他者との『連帯の作法』を身に付けられます」。

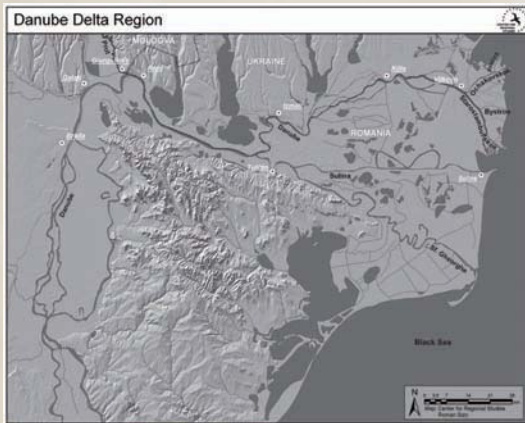
吉田さん自身、海外によく行き、多様な人々と付き合うようにしている。「文献を読むだけでなく、現場の空気を浴びないと分からないことがあります。分からないまま研究していると現実と乖離します」。政治学者の仕事は、政治概念の修正を施しつつ、現実に対して発信をして、両者をすり合わせることだ、と話した。

特集●北大は法学・政治学で未来を築く

多様な 国際社会で 対話するための 「ツール」 —国際法・国際環境法

各国の協力により
問題を解決し、
国際社会の共通利益を
実現する

国際環境法を簡単に言えば、いくつかの国や地域にまたがり、グローバルに広がる環境問題に対処するためのルールということになる。科学技術の発達と経済活動のグローバル化にともない生じてきた様々な環境問題を解決するために、近年になってその重要性は増すばかりだ。しかし、言語も政治体制も宗教も異なる多様な国際社会のなかで、共通のルールを定めたり、実際に適用していくことは非常に難しい。例えば、児矢野さんが研究しているテーマの一つに、ヨーロッパの国際河



ドナウ・デルタ地域 © Center for Regional Studies(Odessa,Ukraine)

川であるドナウ河の環境紛争のケースがある。ドナウ河流域では、ドナウ・デルタでウクライナが大型船舶の可航水路の開削工事を進めている。ところが、ドナウ・デルタを共有するルーマ

ニアが、その開発により環境被害を受ける恐れがあると訴えている。この環境紛争は、ウクライナとルーマニアという直接の当事国間だけでなく、ヨーロッパ全体や、ヨーロッパを超える諸国間でも議論されている。というのも、ドナウ・デルタには、湿地保護ラムサール条約の登録湿地があり、ユネスコ世界遺産条約やドナウ河保護条約も適用され、さらに、国際連合欧州経済委員会の越境環境アセスメント条約や環境に関する公衆参加オプス条約も、この工事に適用されるからだ。また、複数の条約がかかわるので、混乱を避けるために調整が必要なものもある。

このように、環境紛争を解決するためには、時には他の周辺国（さらには国際連合など国際機関）も含めた合意

や調整により対処していくことが必要になる。それに、国際社会には国内社会のように法の履行を強制する政府はなく、国際裁判所も国内裁判所のように強制管轄権をもたないため、国際法は国内法と違って強制力が弱い。だから、国家にどうやってルールを守らせていくかも大きな課題といえる。「環境問題が国際法で議論されるようになったのは二〇世紀半ばから。つまり、一七世紀以来の国際法の歴史から見ればごく最近のことなんです。環境問題は、その性質上、ひとつの国で収まらず他国や地球全体に広がることが多いため、各国が協力しないと解決できません。だから、そのために国際法も、国家間で衝突する利害を調整するといった古くからの消極的なあり方からもうと踏み込んで、共に直面



児矢野 マリ

Koyano Mari

公共政策学連携研究部教授



児矢野さんの著書『国際環境法における事前協議制度』（有信堂高文社）＝右＝、および共著『プラクティス国際法講義』（信山社）

する課題を解決する、つまり共通利益を実現するための積極的なツールとなつてきているんです」と、児矢野さんは語る。

対話の効用と限界を見極める

児矢野さんはさらに、「国際社会で国や地域の価値の多様性を認めながら、直面する問題に対処するためには、『対話』という柔軟い手法が有効な場合も多いです。どのようにして、何を法規範で規律すればよいのか。環境保護といっても、多元的な国際社会で、具体的に何を保護し、また何をどう規制するのか。そして、どうやってルールを守らせるのか。これらの問いに答



北大は法学・政治学で未来を築く

えのために、諸国や関係者間で対話が必要ですよ。では、どういう対話が、どの程度有効か。これが問題。だから、対話という手法の効用と限界を探ることで大きな課題です」と解説してくれた。これは、児矢野さんが長年取り組んできた研究テーマ「国際法における『協議』の意義」の根底にある問題意識である。

国内と国外は切り離せない

もう一つ、児矢野さんが指摘したのは、国際法は決して国際社会に「だけ」関係するのではなく、国内の法や社会ともつながりが深い、ということだ。これは、児矢野さんたちが最近始めた共同研究——「環境分野における国際法と国内法の相互連関」——につながる。

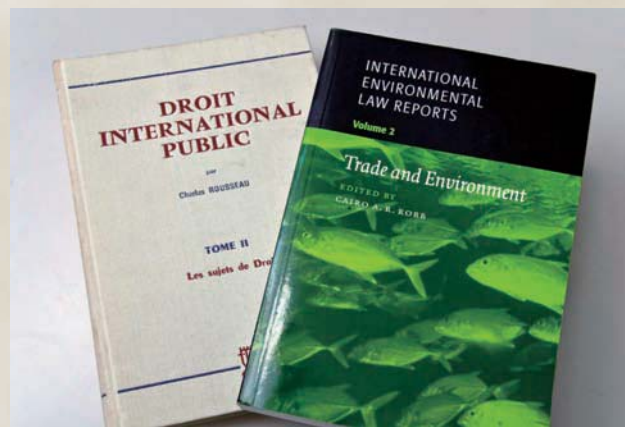
北海道の農業を考えると、農業自由化の問題は避けて通れない。WTO（世界貿易機関）の交渉を乗り切れば……ではすまない。国際的な背景や将来の動向なども見据えて、その先の対応を考える必要がある。漁業でも、ワシントン条約におけるクロマダゴロの規制が論議されたことは記憶に新しい。個々の国や地域の問題と国際問題は、私たちが考える以上につながりが深いわけだ。

また、環境問題の解決では、各国が条約の内容を国内の法体系に取り込んで規制をかけていくという、条約を国内で実施するプロセスも重要だ。そこでは、国内での複雑な利害関係の調整が必要になる。国内規制を行う省庁間の調整問題もある。例えば、有害廃棄物の国際取引を規制するバーゼル条約には、経済産業省と環境省が、また、ワシントン条約には、経済産業省、環境省、農林水産省がかかわる。京都議定書を受け、排出削減のために、原子力と風力や太陽光など自然エネルギーのいずれを重視するかというエネルギー問題も、利害調整が難しい。さらに、省庁間や業界団体などの立場の不一致から、国際交渉が難しくなることもある。国内と国外は連動して、切り離して考えることは難しい。

児矢野さんと言う。「でも、国際社会でツールを使いこなすのはなかなか難しいんですけどね」と笑顔で付け加えた。

国際問題の解決は、政治的な駆け引きや国家間の力関係などに影響されることもあり、とても難しい。しかし、国際法や国際環境法を学ぶことは、この難しい問題とどう向き合い、どう解決するのかという「視点を養う」ことにもつながるのかもしれない。

この「難しい問題に向き合い解決するための視点」は、どんな分野の仕事をしていても、どんな社会で生活していても大切なものだろう。このようにして、国際法の素養は広い範囲で生きてくるものであり、国際法学は実は身近な学問分野なのだ、と、取材を通して感じることもできた。



フランスで定評のある国際法の教科書＝左＝と
貿易と環境との間の相克・調整問題に関する国際事例・判例集



正門横に掲げられている法律相談の看板

特集●北大は法学・政治学で未来を築く

現実社会から 法律を学ぶ

「法律相談室」の活動

北海道大学には、市民が無料で利用できる法律相談室がある。相談者に対応するのは法学部の学生たち。実社会でのさまざまな問題が持ち込まれるこの法律相談室で、学生たちは何を知り、学ぶのだろう。

北海道大学の正門横に掲げられた、「市民のための法律相談」の深緑色の案内看板。法学部の学生たちによって組織され一九六一年から続いている大学公認のサークル活動だ。市民からの土地問題や相続問題、労働問題などさまざまな法律上の相談を無料で受け付けている。その活動を紹介しよう。

相談に訪れた人との面談は個室で行われ、来室した誰もが安心して話せるようになっている。一組の相談者には三人のメンバーが対応する。面談後、相談者には少し待っていてもらい、その間にサークルの控室で担当の三人を中心に、メンバー全員で回答案を検討し、その日のうちに解決策を提示する。その後、毎週行われる顧問の教授や大学院生も出席する事例検討会で再検討し、その結果を電話で伝えるということだ。

法律相談室の活動からメンバーが得るものは何か、法学部三年生の相談室長に聞いた。「法学で学ぶことは、本と講義による抽象的な内容がほとんどです。そんな中で、法律相談室には『生きた事例』が持ち込まれます。現実には起きている法律問題について、対応する法律の条文を多角的に読み解き、自分の頭で考え、仲間と議論して解釈を探します。メンバーの間で意見が分かれることもあったり、決して簡単なことではありませんが、理論を具体的な事例に当てはめて実感できる貴重な学びの場です」と話してくれた。「相談にいらしたときにはとても暗い顔をしていた方が、少し笑顔になって帰られるときは本当に嬉しい」。



相談者への回答を検討する担当者たち。現実社会で起きているさまざまな問題に対して、法律を多角的に解釈することが求められる。

法律問題だけではなく、人の心に触れることもメンバーを育てている。法律を学ぶことで、自分自身の変化はあったのだろうか。「ニュースを興味深く見るようになったね。自分なりの法律解釈を探して事件やできごとを見るようになりました。僕自身は将来、社会の弱い立場の人を助けられるような法曹の現場で働きたいです」と夢を話してくれた。

社会の現場と真摯に向き合う学生たちが、今週末市民の来室を待っている。法律相談は、毎週土曜日一三時から一五時まで法学部一階で受け付けている(相談は無料・予約不要)。

北部食堂

広報課 伊藤仁浩



増設した北部食堂。200の席と麺カウンターができました。



北部食堂限定の朝定食。300円です。



1番人気の250円丼。とろっとした半熟卵入りビビンバ丼は店長イチオシです。



行列ができ、大忙しの丼ぶりカウンター。



催事コーナーも一新。この日は海鮮丼やお寿司がずらっとならんでいました。

二〇一〇年四月一日、北部食堂、通称「ホクシヨク」がリニューアルオープンしました。北大で最も利用客の多い学生食堂である「ホクシヨク」が、昨年から半年もかけて大改修工事を行った理由、そして何が変わったのか取材に伺いました。

一見外観は以前と変わっていないようですが、北側に新しい建物が出来ていました。これが五七〇平米の増築部分で「ホクシヨク」の新しい入口です。奥行きのあるホールには二〇〇の席と麺カウンターが新設。エアコンも装備され、とても快適な環境の中、食事を楽しめるようになりました。

麺カウンターを過ぎると既存の建物につながります。床や壁も一新、明るい雰囲気になりました。最初に目に付いたのが、威勢良く声をかける寿司職人さんです。ここは催事コーナーとなっていて他にクレープやドーナツを提供している日もあります。

新たに設けたビュッフェコーナーでは、コロッケなどのお惣菜が三種類。サラダが一三種類、デザートが七種類と、メニューは豊富です。

改修してとても便利になった「ホクシヨク」。店長の藤澤さんにお話を伺いました。

「改修前は七四〇席ありましたが、それでもランチ時には席に座れないほどの混

雑、さらに注文カウンターやレジでの待ち時間が長く、大変ご不便をおかけしました。今は一〇〇七席に増え、カウンターの拡張、スタッフの増員、レジも五つから七つに増えました。その結果、ピーク時でも混雑がかなり緩和されました。」

一番の人気メニューは二五〇円丼ということで、実際に注文しました。二〇人ほどの列ができていても、五分からずいぶん手にすることが出来ます。こんなに安いのに器は標準サイズ。この日はビビンバ丼でしたが、半熟卵が乗り、辛味がマイルドになってとてもおいしかったです。

また、七月から北部食堂限定で朝定食を始めました。ブリの照り焼きやアジの干物など、栄養バランスを考えた日替わりメニューを三〇〇円という安さで提供しています。授業前に脳へのエネルギー補給におすすめです。朝定食は午前八時～一〇時半までの限定です。

営業時間は平日午前八時～午後八時、土曜は午前一〇時～午後二時、日曜祝日は休みとなっています。最大四〇〇人までの宴会も受け付けています。

一店舗としては国内最大級の学生食堂に生まれ変わった「ホクシヨク」、学生時代の思い出をここで作ってみてはいかがでしょうか。

(いとう きみひろ)

北海道大学総合博物館が収蔵している四五〇万点の標本から地球上で最も繁栄している生物・昆虫と、地球の歴史を物語っている「石」を紹介します。



ヨトウガ、成虫



ヨトウガ、幼虫(ヨトウムシ)、乾燥標本



ヨトウガの生態標本(昭和初期作製)

ヨトウガ

ヨトウガ。漢字では「夜盗蛾」と書く。幼虫は「夜盗虫(ヨトウムシ)」である。日中土中に潜むが、夜になると地上に這い出て、農作物を食い荒らすので、この名がついた。開帳四五ミリの灰黒褐色の翅に白い紋をもつ鱗翅目ヤガ科の昆虫。幼虫は終齢で体長五センチほど。キヤベツなどの害虫として有名である。

明治から昭和初期にかけて、農作物の収穫をあげることに同時に害虫駆除は重要な農学教育使命であった。現在、北大で昆虫学を専攻する研究室は、農学部、理学部など多岐にわたるが、最も古くから研究が行われているのが、農学部昆虫体系学講座(旧昆虫学教室)である。札幌農学校時代からの農業害虫駆除への基礎応用両面の学問として昆虫学が必要であったからである。

二〇〇八年までに農学部から総合博物館へ移動となった昆虫標本は約三五〇万点。そのほとんどが分類学用であり、目一科一属一種といった分類体系にそって、個別の種に分けられ収蔵されている。この標本群にはタイプ標本が多く含まれ、アジアの昆虫の学名(種名)の安定の礎となってきた。

分類標本に混じり、わずかではあるが、標本室の一角に教育目的に作製され

た標本がある。『蛾類生態標本』とラベルされた箱には、成虫、蛹、幼虫、卵、天敵の標本が、種別に並べられている。大害虫ヨトウムシ *Manethra brassicae* のラベル(旧名の *Parathra* 属で表記)の下には、成虫三個体、幼虫五個体、蛹個体が並ぶ。幼虫標本は、内蔵を抜いた後に尾部からストロー(藁)を刺し、空気を吹き込みながら火の上で乾かした乾燥標本である。現在はアルコールなどに浸ける液浸標本が主流で、手間のかかる乾燥標本はほとんど作製されていない。さらにヨトウガ幼虫に寄生するヤドリバエの七個体とその囲蛹殻も並ぶ。ヤドリバエには二種が含まれ、大きいハエがブランコヤドリバエ *Exorista japonica* 雄、小さいのが *Athrycia curviventris* (和名なし)。いずれも鱗翅目幼虫に広く寄生する農業上重要な天敵である。

整然と並べられた分類標本と違い、教育標本には標本の並べ方、作り方に製作者の注意と配慮がみられる。卵や蛹など、すべての発生段階を集めるには長い時間をかけた採集と飼育が必要であったに違いない。「これから農業に携わる若者が、害虫の姿形を頭に叩き込めるように」、そのための教育配慮をもつて作製された標本である。

(総合博物館 おおはらまさひろ)

《その二》エメラルドとその仲間

緑柱石(ベリル)



エメラルド パキスタン産



エメラルド コロンビア、チボール産



ベリル マダカスカル産



エメラルド エジプト産

天然に産出する緑柱石(ベリル)の色は、微量に含まれる遷移金属元素の影響により多様で、それぞれに特有の名称がある。そのうち、特に鮮やかな緑色のものがエメラルド、澄んだ青空色のものがアクアマリンと称され、宝石としても珍重されている。五月の誕生石として有名なエメラルドの語源は、ペルシャ語の *Smaragdus* (緑の石の意味) に由来し、和名は「翠玉」と呼ばれる。エメラルドの緑色は、一般に含有する少量のクロム(Cr)イオンによるが、バナジウム(V)や鉄イオンが少量入ったものも同様な緑色を呈する。このほか、マンガン(Mn)による着色が原因の赤緑柱石(赤いベリルの総称)と呼ばれるモルガナイト(ローズピンク)やビクスバイト(赤色)に加え、微量の鉄含有による淡黄色から濃黄金色を呈するイエローベリルが知られている。中でも、特に黄金色のものがゴールデンベリル、帯緑黄色のものがヘリオドール(ギリシャ語で「太陽の贈り物」という意味)と呼ばれ、熱処理により淡青色のアクアマリンに変わる。それら以外にも無色透明でセシウム(Cs)を含むゴッシェナイト等もある。

他のベリル系鉱物とは異なり、一般にエメラルドは、ペグマタイト中に産出せず、緑色原因のCr元素が含まれる塩基性岩類を源岩とする広域変成岩(滑石片岩、緑泥石片岩

等)中に産する傾向がある。特に、これらの岩石中に酸性火成作用に伴うペグマタイトが貫入した場所付近にエメラルドが生成している事が多い。最も良質なエメラルドを産すること有名なコロンビアでは、エメラルドは広域変成岩ではなく、黒色炭素質石灰岩や頁岩中に発達する方解石(CaCO_3)脈中に産出する。

緑柱石そのものは決して珍しい鉱物でも産出量が少ないわけでもないが、天然産はヒビ割れが多く全体が濁っており、大きな結晶が少なく、きれいな色をしてカットできるものは極めて少ない。「キズの多いエメラルドを得ることは、欠点のない人間を探すより難しい」と言われるほどで、通常は「石霊(せきれい)」と呼ばれる内部的なキズを含め、黒雲母や角閃石などの変成鉱物からなる包有物が多い。また、ダイアモンドやルビー、サファイアなどの硬くて壊れにくい重たい鉱物は、漂砂鉱床(砂レキ中)から産出することもあり、エメラルドは脆くて軽いため一般に漂砂鉱床では採取されない。

主な産出国として、コロンビア、ザンビア、ブラジルなどが挙げられるが、最近では世界中に新産地が増えつつある。

(総合博物館 まつえだ ひろはる)

懐かしき新天地で



池上恒太
法学部一年

この春から、約一五年ぶりに札幌に暮らすことになった。両親の生まれ育った札幌で生まれ、父の転勤に伴って浜松に引っ越すまでの約四年間を北大のすぐ南の公務員宿舎で過ごした。母はよく僕を連れて北大構内へ散歩に出かけたそうだ。記憶にはあまり残っていないが、幼少のころよく足を運んだ北大に私は帰ってきた。

高校一年のころから法学を学びたい、法曹になって活躍したいと考え、実績のある北大を志望するようになった。近くに知り合いもおり、安心して一人暮らしをさせられるという親の考えにも合致していた。そして高校二年の夏にオーブンキャンパスに参加した。物心がついてから初めての北大に足を踏み入れ、その広さに感動した。南門から入って進み、そして右手に広がったメインストリートに圧倒された。先輩方や先生も温かく迎えて

くれた。模擬講義はどれも興味をひかれるテーマで非常に分かりやすく、また先輩との対談の時間には先輩方の充実した生活の話を聞いたり、他の参加者と一緒に様々な質問をして北大へのあこがれ、北大に入りたいと思う気持ちは一層強くなった。

熱意に伴って勉強も部活もはかどり、高校三年の夏にも再び北大のオーブンキャンパスに参加した。前年に引き続き、どの講義も非常に面白かった。さらに前年は時間の都合で参加できなかった模擬裁判に参加した。模擬とはいえ、裁判を傍聴するのは初めてのことであった。裁判といえは有罪か無罪かを決めるという印象が強いように思われるが、模擬裁判は被告人の量刑を争う内容であり、熱い議論が繰り広げられた。人を裁くことのむずかしさを実感するとともに、自分も数年後に同じことができるようになるの

だろうかと思っただけ、このように議論ができたらさぞ楽しからうと思いい、その後の勉強の励みになった。

試験の本番の時には、慣れない雪と寒さ、そして試験前のプレッシャーに押しつぶされそうになった。しかし、前日宿泊したホテルで先輩たちが励ましの言葉をかけてくれたり、いろいろな話をして不安を落ち着けることができ、安心して試験に臨むことができた。

入学してみると、気の合う友人がたくさんできたし、講義も興味をひかれるものばかりだ。サークルにも入り、毎日がとても充実している。この先司法試験を目指す道のは、長く険しいものになるだろうが、この懐かしき新天地で多くの人と支えあい、助け合って頑張つてゆきたい。

(いけがみこうた)

1歳の時、植物園にて母と



＜インフォメーション＞

information

北大交流プラザ「エルムの森」 移転オープン

インフォメーションセンター「北大交流プラザ「エルムの森」」は「旧札幌農学校昆虫学及養蚕学教室」から、利用者のさらなる利便性向上を図るため、正門の横に移転し、六月二十四日にオープンしました。「大学のおもてなし」の場として、学内のイベント情報や学会の開催状況をはじめ、幅広い問い合わせに対応できるように努めるとともに、これまでのグッズショップのほかにカフェも新たに設置して北大へいらした方々をお迎えします。



北大交流プラザ「エルムの森」
電話：〇一一・七〇六・四六八〇
開館時間：午前八時三〇分～午後五時
年中無休（年末年始を除く）
学内行事により臨時に閉館及び開館時間を変更する場合があります。

「緑のビアガーデン」開催します

今年の夏も北大構内でビアガーデンを開催します。

夏の夕べのひとときを緑のキャンパスで過ごしませんか。



実施日時：八月三日（火）～八月七日（土）
一七時～二〇時三〇分

八月七日（土）は一四時～一七時
会場：北海道大学百年記念会館
及びテラス

（札幌市北区北九条西五丁目）
大学構内はお車の入構はできません。

座席数：屋内六〇席、屋外一四〇席
芝生席約一五〇席

チケットの販売

商品はチケットが現金でのご利用になります。が、チケットをご利用いただくと便利でお得です。

○前売りチケット

（販売期間：七月中旬～八月二日（月））

三〇〇〇円（二五〇円券一四枚綴り）

○当日チケット

（販売期間：八月三日（火）

～八月七日（土））

三〇〇〇円（二五〇円券一三枚綴り）

【チケット販売に関するお問い合わせ】

百年記念会館内レストランきやら亭

電話：〇一一・七二六・〇〇六一

※席のご予約は受け付けておりません。

【チケット販売以外のお問い合わせ】

北海道大学総務部広報課

電話：〇一一・七〇六・二六一〇

総合博物館からのお知らせ

総合博物館企画展示

「アラスカの恐竜／アジアをめざした生命」
この企画は、現在米国ダラス自然史博物館と北大総合博物館が共同で米国アラスカ州で行っている恐竜調査の成果を展示するものです。

「極圏という寒く厳しい環境にも恐竜が生活していたという驚愕の事実」「アジアに渡ろうとアラスカまで北上した恐竜たち」「環境の変動と生命の神秘」の三部構成です。

展示標本のほとんどが日本初公開です。その中には、植物食恐竜が集団でみつかったボーンベッドの標本や、ティラノサウルスの仲間の頭骨が三つ、一〇メートルのタルボサウルス全身骨格（肉食）、ハメートルの子育て恐竜マイアサウラの全身骨格などの展示があります。

期間：平成二二年七月二十四日（土）

～一〇月二日（月）

会場：総合博物館三階「企画展示室」
及び一階「知の統合」コーナー

総合博物館

〒〇六〇・〇八一〇

札幌市北区北二〇条西八丁目

電話：〇一一・七〇六・二六五八

開館時間：午前九時三〇分～

午後四時三〇分

休館日：月曜日

ただし、九月二〇日（月）・

一〇月二日（月）は開館、九

月二二日（日）・九月二二日

（火）は休館

サイエンス・カフェ札幌の開催

北海道大学高等教育機能開発総合センター
科学技術コミュニケーション教育研究部
（COSTEP）では、飲み物を片手に科学技術の話題について気軽に話し合う「サイエンス・カフェ札幌」を開催しています。科学技術のさまざまな話題について、専門の研究者をゲストスピーカーに迎えて語り合います。

毎回、多くの市民の方々に参加いただき、好評を得ています。第五三回以降の予定をお知らせします。お気軽にご参加ください。

▼第五三回 平成二二年一〇月二日（土）
▼第五四回 平成二二年一〇月二三日（土）

各回のテーマなどは、決まり次第、ウェブサイトにのお知らせします。場所・時間・定員などは各回共通で次のとおりです。

場所：sapporo5ビル一階
インナーガーデン

（紀伊國屋書店札幌本店正面前）

札幌市中央区北五条西五丁目

時間：午後四時半から午後六時

定員：約一〇〇人

（座席は約七〇席の予定です）

参加費：無料（申し込みは不要です）

当日直接会場にお越しください

問い合わせ先

高等教育機能開発総合センター

科学技術コミュニケーション教育

研究部（COSTEP）

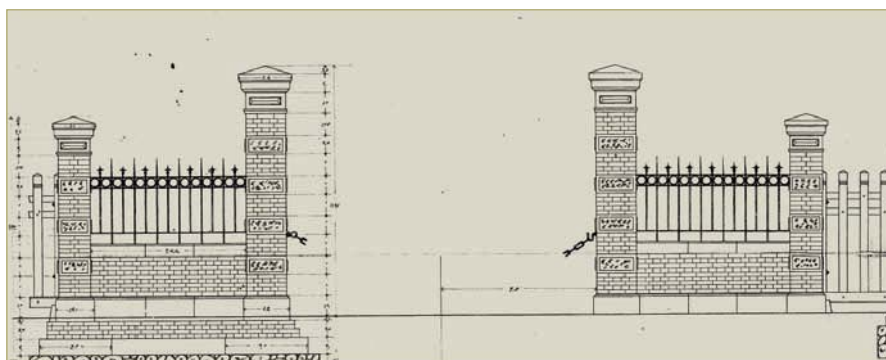
〒〇六〇・〇八一七

札幌市北区北一七条西八丁目

E-mail:office@costep.hucc.hokudai.ac.jp

【第20回】

南門 (旧札幌農学校正門)



●札幌農学校正門之図（北大施設部所蔵）

現在、「北海道大学南門」となっている煉瓦の門は、現在の正門の位置にあったものを移設したものになる。

昭和一一（一九三六）年の正門をはじめとする各所門や塀の改装計画では、南門には正門と同様、新たに石造の門を設ける予定であった。『北海道帝国大学新聞』の記事には「うらぶれた感じの正門」とか「くすんだ灰色の門、古色豊かな煉瓦造りの正門が、今春から明朗近代色の石造に美化され」など、旧しい煉瓦の

◆建築基本データ

所在地:札幌市北区北8条西5丁目
建築年:明治37(1904)年、昭和11(1936)年移築
構造:煉瓦造+石造
設計:文部大臣官房建築課札幌出張所(新山平四郎)
施工:大島喜一郎



●大正14(1925)年8月撮影の正門
(北大総合博物館所蔵)



●現在の南門

(後に出張所長)の新山平四郎である。

この赤煉瓦と石のストライプ模様のデザイン・モチーフはどこにあるのか。全国に現存する同様のデザインの正門は、旧四高(金沢)、旧五高(熊本)、旧八高(名古屋)・現明治村正門、九州大学などにある。前二者は明治二〇年代、後二者は明治四〇年代に造られたが、いずれも石部は平滑仕上げである。当時の札幌農学校キャンパス内に同様のデザインを求めると、現存する煉瓦造の図書館書庫の隅部に瘤出しの硬石を見つけることができる。文部省の標準設計的なものに則りながらも、学校の顔となるべきデザインを、既存の施設から引用した結果といえるだろう。

(いけがみ しげやす)

■リテラポプリ編集委員

逸見 勝亮 (理事)	露崎 史朗 (地球環境)
野坂 政司 (情基セ)	孝子 (メディア)
村松 正隆 (文学)	海津 裕 (農学)
込本 尚義 (理学)	伊藤 仁浩 (広報課)
池上 重康 (工学)	

■リテラポプリ編集協力

科学技術コミュニケーション教育研究部 (CoSTEP)

■本誌に関するご意見をぜひお聞かせ下さい。

■本誌は北大構内で無料配布しています。

郵送のご希望もお受け致します。

■連絡先:北海道大学総務部広報課

〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL:(011)706-2610 FAX:(011)706-4870



2005年6月に植樹したポプラ
(2010年6月15日撮影)